2026.7.19

※以下の記録は筆者が会場で聞き取ったメモを基にしており、発言者から確認などはいただいておりません。したがって内容には間違いや誤解、遺漏の恐れがあります。仮にあれば全て筆者の責任です。したがいまして引用や転載はご遠慮ください。

令和８年度　九州考古学会　夏季大会（福岡大会）の概要

「今、九州の弥生時代墓制を再考する―地域比較と社会変容の新展望―」

大会は基調講演と３本の事例報告、さらに５本の地域報告、最後は発表者による総括的なシンポジウムという構成であった。

１　基調講演

溝口孝司（九州大学）「弥生時代墓制研究の方法」

【概要】

- 弥生時代の墓制研究の方法を従来の、墓地が社会組織を直接的に反映しているとして読み解く方法から、死者を媒介として生者たちが社会関係を表現・確認・更新する葬送コミュニケーションの場として読み解く方法へ転換させるため、ここに新たな分析視点を提唱する。
- 提唱する理由は、マルクス主義的な社会構成体史論を背景として形成された弥生農耕社会発展モデルは、少なくとも墓地においては反映されていないためである。
- 墓地の被葬者を家族集団や特定家族集団とする前提は再検討の必要がある。

- 墓地の分析にリニアリティ（linearity）とラテラリティ（laterality）さらにはソダリティ（sodality）の視点を導入することが重要である。
- リニアリティとは「祖先から子孫へと連なる系譜的記録」。ラテラリティとは「同時代的な共働性、同胞性、側方的な結合原理」
- ソダリティとは「超集落的・超地域的結合単位」である。
- これらの視点から見ると弥生墓制の変化は「単位集団から集合体へ」「家族集団から地域集団へ」「有力家族析出から王墓の出現」といった直線的発展・進化図式では説明しきれない。
- このような視点を提示することにより、北部九州の甕棺墓制を標準モデルとして他地域にあてはめるのではなく、九州各地域の墓制を、それぞれ異なる社会変容の軌跡として比較するための共通の分析枠組みを提案する。

２　【概要は省略します】事例報告

（１）須玖岡本遺跡岡本地区の墳墓　井上義也（春日市文化財課）

（２）佐賀市大和町七ヶ瀬（しちがせ）遺跡について　馬場昌平（佐賀市文化財課）

（３）黒髪町遺跡群における弥生時代の周溝墓の発見とその意義
山野ケン陽次郎（熊本大学埋蔵文化財調査センター）

【以下の地域報告のうち、研究史・墓群構造・副葬品・居住域との関係は省略】

３　地域報告

（１）九州北部ー玄海灘沿岸地域における墓群構造の比較を中心にー
上田龍児（大野城心のふるさと館）

①遠賀川流域：中期を通じて土坑墓のみで構成。列墓 a 的な様相を呈す。後期には黒山遺跡で墓域が継続し、土坑墓・石蓋土坑墓・石棺墓で構成する。
中・後期を通じて区画墓や系列墓は確認されていない。

②宗像地域　：中期を通じてほぼ土坑墓のみ。
富地原梅木遺跡や朝町竹重遺跡は後期も継続し、土坑墓や石蓋土坑墓で構成。遠賀川流域と同じく列墓 a の様相に近い。後期は土坑墓や石蓋土坑墓で構成。田熊石畑遺跡で区画墓Ⅰが見られる。

③古賀地域　：中期は土坑墓を主体とし、大形甕棺墓が客体的に混在する。列墓がみられる。後期の事例は少なく、土坑墓が確認されている。

④粕屋地域　：中期は大形甕棺墓と土坑墓が混在。区画墓がある。後期は事例が少ないが、内橋登り上り遺跡では一定の範囲内に石

棺墓・石蓋土坑墓・土坑墓が規則的に配置され、乳幼児用と考えられる小形埋葬施設も併存することから区画簿墓Ⅲと理解できる。

⑤福岡平野　：中期初頭では土坑墓もしくは土坑墓と甕棺墓が混在した列墓が優勢。
中期前半には甕棺墓主体の列墓に変化。区画墓Ⅰが存在。
中期後半には列墓から系列墓に変化。後期初頭まで甕棺墓で構成する系列墓が継続。後期前半以降、甕棺墓は急速に消滅し、土坑墓・石蓋土坑墓・石棺墓が優勢となる。後期前半から区画墓Ⅲが確認できる。

⑥二日市地峡帯：中期初頭は土坑墓や土坑墓と甕棺墓が混在した列墓が優勢。
中期前半には甕棺墓主体の列墓に変化。中期中葉から中期後半には系列墓が出現し、後期初頭にかけて継続する。
後期前半には一部甕棺が残るが、次第に土坑墓・石蓋土坑墓・石棺墓が優勢となる。後期以降、区画墓Ⅲが認められる。

⑦早良平野　：中期初頭では土坑墓もしくは土坑墓と甕棺墓が混在した列墓が優勢で、中期前半には甕棺墓が主体の列墓へと変化する。列墓は中期後半まで継続する事例もあるが、次第に系列墓が優勢になっていく。区画墓Ⅰ、Ⅱが認められる。
期初頭までは甕棺墓を主体とした系列墓が継続し、後期前半以降は一部甕棺があるものの土坑墓・石蓋土坑墓・石棺墓が主体となる。後期の区画墓は明確ではない。
なお、中期において列墓から系列墓への変化が顕著な中で海浜部の西新町遺跡、藤崎遺跡、姪浜遺跡では明確な列墓、系列墓を形成しない。

⑧糸島平野　：中期初頭から中期前半までは土坑墓と甕棺墓が混在した列墓を形成し、次第に甕棺が優勢となっていく。列墓は中期後半まで継続する可能性があるが、一部で系列墓化が進行。
中期後半には三雲南小路いせきで厚葬墓があるほか、井原塚廻遺跡は同時期の区画墓、平原５号墳は後期初頭前後の区画墓である。
後期以降、甕棺に替わって壷棺が顕在化するとともに、土坑墓・石蓋土坑墓・石棺墓が主体となっていく。
井原鑓溝遺跡は後期前半の厚葬墓で、後期後半以降は複数の墓域で区画墓Ⅲが顕在化していく。

（２）東九州

渡邉隆行（日田市文化財課）

①地域区分

地域Ⅰ：周防灘沿岸

①京都平野②中津平野③宇佐平野に細分

地域Ⅱ：別府湾岸（大分平野）

地域Ⅲ：大分内陸部（高原地帯）

地域Ⅳ：筑後川上流域（日田玖珠盆地）

②東九州全般の様相

- 成人用甕棺墓は地域Ⅰの後期末以降と地域Ⅳの中期から後期末の特定の墳墓のみに採用。
- 土坑墓ないし木棺墓が主体で中期中頃以降に石棺墓や石蓋土坑墓が採用されるようになる。
- 単独墓域は列状ないし列を指向した塊状をなすものが多い。
- 後期末には列を指向する塊状を基本としつつ、方形周溝墓があらわれる。

（３）長崎ー佐賀県　渡部芳久（佐賀県立博物館）

①弥生早期～前期

- 支石墓が長崎県本土西岸、唐津湾沿岸、佐賀平野東部の３箇所に集約。下部構造は長崎が石棺墓主体、唐津が土坑墓主体、佐賀平野が石蓋土坑墓+小児用土器棺と明瞭な地域差がある。
- 支石墓の立地は表層地質と深く関係し、基本的に墓地近辺で産出する石材が用いられる。
- 前期後半の長崎では支石墓の下部構造としての石棺が弥生時代の石棺墓へ移行し、在地化。
- 唐津では大友遺跡を除き石棺墓はあまり見られない。
- 佐賀平野では前期後半に土坑墓と壺棺墓が展開し、前期末に甕棺墓へ変遷する。早期から前期の石棺墓の検出例は少ない。
- 長崎では前期末以降に石棺墓主体の小規模墓地が出現する。
- 前期後半になると長崎・佐賀の各所で壺棺墓が展開する。

②弥生中期

- 佐賀ー長崎の甕棺墓は佐賀平野と唐津に集中する
- 長崎の大型甕棺の分布は前期が五島列島～松浦郡、中期前半が松浦郡、中期後半が高来郡、中期末が彼杵郡へと変遷する傾向がある。
- 外来系土器として黒髪式の小型棺が分布する。
- 長崎では中期以降も石棺墓主体の墓地が継続する。

③弥生後期

- 三津式以降、甕棺墓の衰退と石棺墓・土坑墓の普及が顕著であるが、後期後半から終末期も甕棺墓がわずかに残存する。
- 長崎では引き続き石棺墓と土坑墓が主体。
- 唐津～佐賀平野では石棺墓単独の墓地はみられない。

・佐賀平野で産出しない玄武岩・安山岩系板石を用いた一部の石棺や石蓋（土坑墓、甕棺墓）の石材は長崎から持ち込まれた可能性が高く、中期以降に佐賀平野西部から東部へと徐々に波及したと見られる。
・また佐賀平野では、長崎で弥生後期～古墳初頭にみられる小口片側が狭まる形態（寺田 2005 図 8 のⅢｂ）に類似する石棺墓が存在する。
・こうしたことから佐賀平野の石棺墓は長崎から波及したとみられる。

（４）熊本県域ー九州山地　　宮崎敬士（熊本県教育委員会）
・土坑墓を基本として、中期後半に土器棺墓、後期中葉以降に石棺墓、終末期以降に大型木棺墓、そして古墳時代前期以降に周溝墓が加わる。

（５）南部九州　　石田智子（鹿児島大学）
①地域区分
Ａ：甑島列島、Ｂ：薩摩半島（a 西岸　b 内陸　ｃ南岸）Ｃ：北薩
Ｄ：霧島山麓盆地地域（a 西麓　b 東麓）Ｅ：志布志湾沿岸地域
Ｆ：種子島　Ｇ：宮崎平野（ａ南部　b 北部）Ｈ：五ヶ瀬川流域

②弥生時代前期
・弥生時代開始期の墳墓は未確認
・弥生時代前期にはＢａ、Ｄa 地域で土器棺墓（壷棺墓）Ｂb、Ｄb 地域で土坑墓が確認されている。
③弥生時代中期
・基本的には土坑墓が中心で古墳時代前期まで継続
・外来系墓制の導入が注目される。
・Ｂa 地域の田布施平野、伊作平野に甕棺墓が分布
・甕棺墓が分布する地域で大石が確認されており、支石墓と評価されてきたが、甕棺墓の標石とする見解もある。
・Ｂa 地域では有明海沿岸地域との濃密な関係がある。
・Ｅ地域では有明海沿岸地域に系譜をもつ横口式土坑墓、瀬戸内地域（特に備讃瀬戸周辺地域）との関係が考えられる周溝墓が確認されている。
・中期後半にはＣ地域で石棺墓が確認される。西北部九州・中部九州における墓の構造体に石を使用する思考を導入したもの。
④弥生時代後期
・Ｂa 地域では引き続き土器棺墓が確認される。
・Ｃ・Ｄa 地域では、石棺墓の下部構造が在地の土坑墓に変容した石蓋土坑墓が定着する。

・Ｆ地域の覆石墓の成立についても、西北部九州・中部九州との関係が想定されている。

⑤弥生時代終末期

・Ba 地域では南摺ヶ浜遺跡で土坑墓→円形周溝墓→立石・土器棺墓→楕円形状土坑墓→中型隅丸方形状土坑墓の変遷が整理されている
・Ga 地域では引き続き土坑墓が主体である。
・特にGb 地域における周溝墓・墳丘墓の出現が注目される。

４　シンポジウム

進行：溝口

【溝口】地域発表を聞いて分かるのは、九州の墓制が複雑であることで、既存の枠組みを超えている。

１　列状　人々がともに行動する
２　垂直性
３　集会場

以上３つのバランスによって語れるのではないか。

討論は以下のラウンドで進めていく

【第１ラウンド】マルクス主義の枠組みで語れるのか
溝口が提起する枠組みで語れるのか

【第２ラウンド】　地域での画期
タイミングの違い
なぜ違いが出てくるか

【第３ラウンド】　会場からの質問を受ける

【第４ラウンド】　墓制研究の未来について

（１）第１ラウンド

【溝口】　寺澤薫の「家族集団」、高倉洋彰の「地域集団」の概念は墓地に適用できるのか。

【上田】　墓地から集団が見えるか。区画墓３では特定家族墓が見える。
大型墓域が地域の共同墓地の紐帯になるのではないか。

【大分／渡邉】北部九州とは異なる。
区画墓の被葬者は地域集団のリーダーと言えるのではないか。

【溝口】　区画墓の中心に埋葬された人々はどういう人々か

【佐賀／渡邊】甕棺は列墓が中期前半　男性中心

【宮崎】　発表した墳墓遺跡は均質墓と言える。コンパクトな墓である。
単一集落では、まかえない数でもある。

【溝口】　トグウ遺跡の人々はどういう人か

【宮崎】　阿蘇リモナイトを介した集団と想定している。

【溝口】　流動的な集団と考えてよいか

【宮崎】　もう少し集落の様相が明らかにならないと無理ではないか。
【石田】　今のところ、墓からは見いだせない。福岡の状況とは異なる
【溝口】　二層構造はどう考えられるか。中期になって九州にみられる。南九州でも重要か。
【井上】　列墓は見られない
区画墓は見られる。
【溝口】　王族墓のイメージは
【井上】　よく分からない
【馬場】　基本的に佐賀平野は列墓中心である。
【山野】　神水（くわみず）遺跡の区画溝は切り合いがない。大中甕棺、土器棺があるところから家族墓的である。
【溝口】　神水遺跡の周溝墓は特異な構造である。
（２）第２ラウンド
【溝口】　各地の特質をどう説明するか
【上田】　遠賀川以東は列墓
博多湾沿岸は中期初頭に系列墓の動きあり。
青銅器の副葬　行きつ戻りつしながら後期に進む
博多湾沿岸は列墓から系列墓に変化している。
【溝口】　現れては消えるという状況のようだ。早良の区画墓出現の速さは初期の青銅器の多さと関連があるか
【上田】　まさにしかりで、区画墓が早めに出てくる要因だろう
【大分渡邉】人口増大が中期後半にみられ、列墓や区画墓がでてくる。当地では博多湾沿岸に比べると遅れるのではないか。
【佐賀渡部】長崎は石棺墓主体で、佐賀は甕棺墓主体である。
中期初頭から青銅器を持つ墓がつくられる。
【溝口】　佐賀にはなぜ厚葬墓がないのか
【井上】　厚葬墓がある方が異様ではないか　列墓が一般的で、ないのがあたりまえと考える。
【宮崎】　地域性は均質化　地域の産物を加工する　ベンガラ、鉄
鉄は木工具　手工業的な側面がある。
【溝口】　生産流通のコントロール者がいるはずだが　でなかったのか
【宮崎】　地域内にいたのかが問題
植民地的なものではなかったかという意見もある
【石田】　基本的にはフラット　外部世界とのつながりに濃淡がある。
南海産貝輪ルートの変更の影響が大きい。
宮崎県は瀬戸内の土器の流入が影響
地域によって一時的な人口増が見られる。
【溝口】　社会の複雑性がリニアリティを強くさせる。墓制にはラテラリティが強い
【井上】須玖岡本の厚葬墓は青銅器生産の増加による。

【溝口】　青銅器生産はなぜそこで行われたのか
【井上】　そもそも食っていけるのか　須玖遺跡で水田が分かっているのは一部である。　谷水田は存在する。
【溝口】求心性が高まっていくと　権力の物質が多系統である。
【山野】　熊本では地域性は明確にある。北部九州から強い影響がある。
【溝口】　単独であった場合はどうか
【山野】　削平されているが、遺物の出状況から追善も考えられる
（３）質疑応答ならびに（４）墓制研究の未来【省略】